



**Vol.5**

**2021.10.28→31**

**3331 ART FAIR**

オンライン展示会(10/28~12/31)併催

**出展作家紹介**



# 荻野由梨

## バイオグラフィー

2019～現在 多治見市陶磁器意匠研究所職員  
 2018 多治見市陶磁器意匠研究所嘱託職員  
 2018 多治見市陶磁器意匠研究所セラミックスラボ修了  
 2017 愛知教育大学大学院教育学研究科芸術教育専攻美術  
 科内容学領域修了  
 2015 愛知教育大学造形文化コース卒業

## 受賞／入選／収蔵

2020 第54回女流陶芸展 女流陶芸大賞  
 2019 Korean International Ceramic Biennale 2019 入選  
 2019 第6回陶美展 入選  
 2016 第4回陶美展 奨励賞

01

## 推薦者 | 中島晴美 | 陶芸家、多治見市陶磁器意匠研究所所長

走泥社の熊倉順吉先生は「土と炎から生まれるやきものの宿命的な姿」と話された。私は荻野由梨の作品を見るときなぜかその言葉を思い出します。荻野は、ひたすら「土の可塑性」のみを拠り所に、生の粘土の板が自然に作った有機的な形だけをひたすら見つめ続けて制作します。それは、自身の内なる宿命的姿を探しているように見えます。生命形態を思わせる特異な作品は、陶芸の持つ表面的な素材感の魅力を求めるのではなく、土が本来持つ本質的なものに惹かれ自分自身を探るような制作姿勢から生まれるのでしょう。陶芸の造形の真ん中で制作する彼女に期待しています。



荻野由梨（おぎの・ゆり）

陶芸家

1992 愛知県岡崎市生まれ  
 現在 岐阜県多治見市在住、制作



特徴 | たたら成形、手びねり成形

私は粘土の柔らかな表情に魅力を感じ制作しています。  
 粘土を積み上げていく中で出来上がる形には、自分でも気づかない  
 ような自己の内面が現われるよう思います。

## 主な展覧会

2021 やきものの現在 土から成るかたち - Part X VIII  
 (多治見市文化工房ギャラリーヴォイス、岐阜)  
 2019 やきものの現在 土から成るかたち ishokenの造形  
 (多治見市文化工房ギャラリーヴォイス、岐阜)  
 2016 安藤祐輝・岩田結菜・荻野由梨・中島晴美・山口美音・森綾展  
 (ギャラリー数寄、愛知)  
 2015 焼けてかたまれ火の願ひ  
 (多治見市文化工房ギャラリーヴォイス、岐阜)  
 2015 陶とガラスの造形展 (瀬戸市新世紀工芸館、愛知)



# 五嶋穂波

## バイオグラフィー

2021 多治見市陶磁器意匠研究所

セラミックスラボ 所属

2021 同研究所 デザインコース修了

2019 国際基督教大学 教養学部卒業

## 受賞／入選／収蔵

02



## 推薦者 | 駒井正人 | 陶芸家、多治見市陶磁器意匠研究所 職員

五嶋の作品は、ふわりと広がる土の形態と柔らかいマチエールを特徴とします。その優しい器の形は、柔らかい板状の粘土を薄く伸ばすことで生まれます。一つ一つ丁寧に指先で土の感触を確かめながら進められる制作は、土との交感の中でこそ生まれる素材との独特的な関わりを核とします。それは力を加えることで伸びて広がる土と自身の感覚が一体となって生まれる形です。器全体を包み込む白を基調とした釉薬は、焼成を通して溶け合い混じり合い、陶磁器ならではの柔らかさを生み出します。五嶋の考える陶磁器の魅力が込められた優しく心地良い器です。

五嶋穂波（ごしま・ほなみ）

陶磁作家

1996 岐阜県瑞浪市生まれ 在住  
現在 多治見市・瑞浪市で制作

特徴 | 陶磁、たたら成形、型押し、手びねり



ふわりとした形状と流れるような釉薬を組み合わせ、全体として軽く心地よく感じるバランスを模索しています。土と釉薬が溶け合うことで、淡く纖細な色彩と柔らかな質感を楽しめる作品を目指しています。

## 主な展覧会

2021 多治見市陶磁器意匠研究所 卒業後11人展  
(at Kiln AOYAMA、東京)

2021 多治見市陶磁器意匠研究所卒業制作展2021  
(セラミックパークMINO、岐阜)



# 丹羽一尊

## バイオグラフィー

2021 多治見工業高校専攻科修了

## 受賞／入選／収蔵

2020 濑戸市美術展<陶芸部門> 優秀賞

2021 多治見工業高等学校 寄贈（安全地帯、2020）



**推薦者 | 伊村俊見** | 陶芸家・岐阜県立多治見工業高等学校 専攻科（陶磁科学芸術科）教諭  
丹羽君の作品は、方形を構成してかたちがつくられている。しかも不定形な土で方形のかたちにこだわり、エッジや面をストイックに作り込んでいく。焼成すると土から陶に変質する過程で、収縮やひずみなどの土の生理がストイックに追及されたかたちに生じる。そのことが方形から生まれるモダンさと土の生理を共存させ、クールな雰囲気を醸し出している。



丹羽一尊（にわ・かずたか）

陶芸家

1984 東京都生まれ  
現在 岐阜県多治見市にて制作

特徴 | 手びねり、ひもづくり、粘土



自分にしかできないことよりも、自分ができることを見つめながら作品を制作しています。作品を手に取っていただくような機会はほとんど初めてのことですが、来場される皆様との出会いを楽しみにしています。

## 主な展覧会

2021 多治見工業高校専攻科修了制作展  
(セラミックパークMINO、岐阜)



# 古井晶子

## バイオグラフィー

2012 愛知教育大学大学院教育学研究科芸術教育専攻 修了

## 受賞／入選／収蔵

2019 陶美展 奨励賞

2007 神戸ビエンナーレ入選

04

## 推薦者 | 中島晴美 | 陶芸家、多治見市陶磁器意匠研究所所長

吉井晶子さんは沈思黙考型の人である。制作は自己の内を見つるように黙々と淡々と行う。それは、素材を造形作品へと昇華させるために制作の中で発見した自分だけの技術を使い、自己との密接な関係を通してこそ成立するかたちを求めるからだろう。言い換えるならば、素材や技術に導かれて自己との関係の中で形が立ち現れるところにその制作の意味を見つけようとするからだ。小さな土片が土片に張り付きながら幾重にも重なる集積のフォルムは、触覚的感覚をゆさぶり彼女の内面をあぶりだしているようで魅力的だ。



古井晶子（ふるい・あきこ）

## 陶芸家

1987 愛知県生まれ  
現在 愛知県にて制作

特徴 | 半磁器土、陶磁器造形、手捏り



曲立した土の紐の連なりから流れが生まれ、絡まった土片が過重を分散しあって立ち上がる姿を追いかけている。息を詰めて思索に耽る制作の時間は、自分自身を腑分けするようでもある。

## 主な展覧会

2021 古井晶子展（ギャラリー数寄/愛知）

2019 やきものの現在 土から成るかたち-Part XVII（ギャラリーヴォイス岐阜）

2018 SELECT展VI（ギャラリー数寄/愛知）

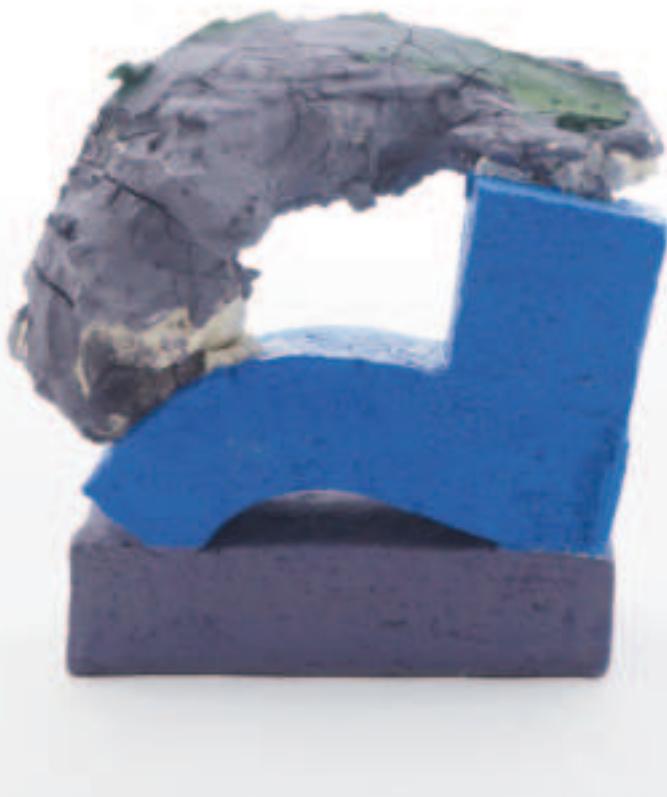
2015 愛知教育大学-陶とガラスの造形展（瀬戸市新世紀工芸館/愛知）

2010 愛教大の造形展（愛知県陶磁美術館）

# 蓑輪孝治

## バイオグラフィー

2016～2020 吉川千香子氏に師事  
2016 とこなめ陶の森陶芸研究所 卒業



## 受賞／入選／収蔵

2019 ガーデンテラス久我山（東京）作品設置



## 主な展覧会

2020 水面（ギャラリー温、三重）  
2019 KOREA-JAPAN EXCHANGE CERAMIC ART EXHIBITION  
(韓国)  
2018 珠洲そして六古窯 （備前焼ミュージアム、岡山）

## 推薦者 | 吉川千香子 | 陶芸家

蓑輪孝治氏は、とこなめ陶の森陶芸研究所を卒業後に、私 吉川千香子の下で陶芸家を目指すべく学んでおりました。もともと基礎技術力が身についていたため、助手として優秀でした。さらに、私の陶芸家としての暮らしを通して、「作家が独りよがりで作る陶芸」ではなく、お客様との会話やコミュニケーションを通じて、お客様の日々の暮らしの中で愛される作品たちの佇まいを感じてほしいこと、それと同時に、お客様からの感謝の言葉が次の想像力を掻き立てるエネルギーになることを私の傍らで、少しでも気づいてもらえたならと思っていました。それらを肌で感じ、蓑輪氏の作品に新しい息吹をもたらすきっかけをつかみ、私のもとから、胸を張って独立していきました。蓑輪氏は、独立してからも、自らの「陶芸の原点」を意識し、しなやかな思考で作品制作を行っています。そして、齢を重ね、繊細さと大胆さを兼ね備える作品を拝見するたびに、これから将来が楽しみな陶芸作家であると期待しております。



蓑輪孝治（みのわ・たかはる）

陶芸家

1995 石川県金沢市生まれ  
東京を経て 現在 愛知県常滑市にて制作

特徴 | 陶土、磁土、顔料





# 村田言恵

## バイオグラフィー

2020～ 富山県氷見市に工房を作り、制作活動開始  
2017 金沢美術工芸大学 美術工芸研究科 修了  
2015 沖縄県立芸術大学 デザイン工芸学科 卒業

## 受賞／入選／収蔵

2019 アート＆クラフトin御仏供杉'19 奨励賞  
2017 KANABIクリエイティブ賞 審査員特別賞  
2013 第53回日本クラフト展 入選



## 推薦者 | 山本健史 | 陶造形家、金沢美術工芸大学 工芸科 教授

村田言恵はこれまで6年以上にもわたる釉薬研究の結果、オリジナルの色彩や質感をもった作品の実現に成功しています。その技術をもって村田が作る作品の世界観は、神話や民話から現代の小説やマンガまでの大きな広がりからかたち作られた物語です。釉薬研究には化学の応用力が欠かせないのですが、同時に創像力とその像を物で語るという両極にあるふたつの才能を持ち合わせているところが村田のユニークな点です。作品を手に取って眺めていると不思議な面白さ、ワクワクさせる世界があふれ出てくるのを感じます。やきものにしかできない、釉薬が放つ色彩と質感とが村田の世界観と結びつくことで「土の物の語り」が誕生したのです。



村田言恵（むらた・ことえ）

## 陶芸家

1992 石川県河北郡内灘町生まれ  
沖縄、金沢、奈良を経て  
現在 富山県氷見市に在住、制作

特徴 | 手びねり成形、  
高火度釉薬の特性を活かした加飾



私は『陶』という素材が好きです。土で造形する楽しさと、釉薬の美しさに惹かれ、私は陶芸という創作活動を続けています。そうして生み出した作品が、見る人使う人の心を豊かにする存在であれば幸いです。

## 主な展覧会

2020 Clayarch Winter International Ceramic Art Camp2020  
(クレイアーケ金海美術館、韓国・金海)  
2019 KOUGEI Art Fair Kanazawa 2019  
(THE SHARE HOTELS KUMU、石川)  
2015 2015アジア現代陶芸展 (中国美術学院美術館、中国・杭州)  
2015 コウゲイ°C-素材と今の接着点- (金沢21世紀美術館、石川)



# 望月美鶴

## バイオグラフィー

2009 愛知教育大学 造形文化コース 卒業  
2011 愛知教育大学大学院教育学研究科美術科内容学領域  
修了

## 受賞／入選／収蔵

2021 国際工芸アワードとやま2020入選  
2018 第1回ぎふ美術展 入選  
2017 第3回金沢・世界工芸トリエンナーレ 入選  
2014 第10回国際陶磁器展美濃 入選

07

## 推薦者 | 中島晴美 | 陶芸家、多治見市陶磁器意匠研究所所長

望月美鶴さんの制作姿勢は、粘土という素材の持つ可塑性と陶に至る焼成へのアプローチの仕方を通して、感情と理性の折り合いをつけようとするところにあると思います。それは素材を熟知し表現へと昇華させる熟練した技術を必要とする。言い換えるれば、「素材」と「私」の密接な関係を経験することでしか成立しない造形に立ち向かう姿勢ともいえる。長い制作の時間の中で自分だけの技法を編み出し、そこに潜在的な造形力が相まって「内なる私」を暴き出す。それが彼女ならではの特異な生命形態を思わせる、魅力的な作品を生み出す理由だろう。



望月美鶴（もちづき・みつる）

陶芸作家

1987 愛知県生まれ  
現在 愛知県長久手市在住

特徴 | 手捏り、陶土、泥漿



手捏りで成形した棘を規則的に集積した作品です。細い棘や接着面は窯の熱で動きを得、温度が下がると緊張感のある体を成します。この焼成による変化を経て初めて作品が生まれるような感覚を大切に制作しています。

## 主な展覧会

2020 森のアート展vol.11 あととのいま 猿投窯エリアの作家たち Part1 (豊田市民芸の森、愛知)  
2018 親子で楽しむコレクション窯芸の色彩 (茨城県陶芸美術館、茨城)  
2016 進行形・女子陶芸II (茨城県陶芸美術館、茨城)  
2015 陶とガラスの造形展 (瀬戸市新世紀工芸館、愛知)  
2011 やきものの現在 土から成るかたちPartVII (ギャラリーヴォイス、岐阜)



# 遠藤 茜

## バイオグラフィー

2020 金沢美術工芸大学大学院 美術工芸研究科 工芸専攻  
漆・木工コース入学 修士課程2年 在籍中  
2016 金沢美術工芸大学 工芸科 入学

## 受賞／入選／収蔵

2020 国際工芸アワードとやま／入選  
2019 公益財団法人 日本交通文化協会  
第40期国際瀧富士美術賞／優秀賞  
2018 第74回 金沢市工芸展／入選



## 推薦者 | 田中信行 | 漆造形家、金沢美術工芸大学教授

彼女の制作テーマは「漆工芸における労働的プロセスと創造性について」です。漆芸のもの作りの特性である繰り返しが多く、時間と手間のかかる作業性（労働性）に着目し、そのような作業性から導かれる高価で高尚な物としてのイメージに対して疑問を呈すような作品を制作してきました。また、柳宗悦が提唱した民芸的なものの在り方にも興味を持っており、労働性と創造性の融合を試みようとする独自な着眼点と感性によって生み出される作品は、ユーモラスで従来の漆芸にはない新たな魅力を広げる可能性に富んでいます。



遠藤 茜 (えんどう・あかね)

漆工／造形作家

1997 岡山県生まれ 現在 金沢市在住

特徴 | 乾漆技法、変わり塗り



主に漆を用いて、家・労働・複製性をテーマに立体作品を制作する。漆の独特的な制作プロセスに着目し、より創造的でラフな工芸作品を制作することを目的としている。

## 主な展覧会

2021 めいをうつ (グループ展: 鍛冶町倉庫、石川)  
国際工芸アワードとやま2020 (富山県美術館、富山)  
2020 リビングは続く (個展: Books under Hotchkiss 2F、石川)  
新人アーティスト展 (Artshop月映、石川)  
2019 SOMETIME SOMETHING (グループ展: ギャラリートネリコ、石川)



# 小西紋野

## バイオグラフィー

- 2015 独立 彦十蒔絵の蒔絵制作を開始
- 2011 甚松屋蒔絵店 中島和彦氏に師事
- 2011 石川県立輪島漆芸技術研修所普通研修課程  
蒔絵科卒業
- 2006 明治学院大学法学部政治学科卒業

## 受賞／入選／収蔵

- 2020 国際漆展入選
- 2017 国際漆展入選
- 2015 兼六園大茶会工芸公募展 奨励賞



FIRST  
PATRONAGE  
PROGRAM  
Vol.5 2021秋

## 推薦者 | 若宮隆志 | 彦十蒔絵プロデューサー、2014年度文化庁文化交流使

小西紋野さんの蒔絵は、彼女にしか出せない特殊な色使いと調和がありどこか心の落ち着きを感じる。石川県立輪島漆芸技術研修所を卒業後、刀剣装飾や印籠製作を得意とする明治45年創業の中島甚松屋蒔絵店三代中島和彦氏に弟子入り、江戸時代の名工の技術やデザインをよく研究し修復などを通して技術を磨き、今ではなくなってしまった蒔絵道具の制作や色漆の制作にもチャレンジしていた。また仕事の取り組み方として仕事は自分で考えること、黙ってみて習うこと、分からないうちがあれば徹底的に調べるなどの基本姿勢が身についている。また音楽家の一家に生まれ幼い頃よりバイオリンを習っていたことにより、彼女の制作する作品には周りの色に調和する色合いや、音楽のメロディを感じさせられるような特徴があるように感じる。

小西紋野（こにし・あやの）  
蒔絵アーティスト

1983 東京都立川市生まれ 神奈川県  
相模原市を経て 現在 輪島市にて制作

特徴 | 金銀粉・色漆・螺鈿・卵殻等を  
用いた研出蒔絵、高蒔絵、  
及び新しい素材・技法の研究



螺鈿・卵殻など貼りものの材料は使いこなしつつも、金銀粉や色漆を用いた筆使いの生きる作品づくりを心掛けています。色漆は鮮やかな発色の調合にこだわり、色彩豊かな表現を目指しています。

## 主な展覧会

- 2021 小村雪岱スタイル～江戸の粋から東京のモダン～  
彦十蒔絵の蒔絵担当（三井記念美術館）
- 2017 彦十蒔絵若宮隆志展～Featuring小松美羽～  
蒔絵パネル制作（銀座三越）



# 齋藤みどり

## バイオグラフィー

2017 金沢美術工芸大学大学院  
美術工芸研究科工芸専攻修士課程 修了  
2015 金沢美術工芸大学 工芸科 卒業

## 受賞／入選／収蔵

2017 国際漆展・石川2017 山田節子賞 受賞

10

## 推薦者 | 田中信行 | 漆造形家、金沢美術工芸大学教授

齋藤さんは、自然と人との関わりを表現のコンセプトとしており、要となるのが漆の「縮み」である。通常、漆は塗りや加飾（蒔絵、螺鈿、卵殻等）の美しさがイメージされるが、彼女の作品の最大の特色は、漆の物質としての表情の一つである「縮み」から表現が導かれていることにある。「縮み」は漆の乾燥中に表面が縮れたことから生まれる現象であり、通常の漆器作りでは失敗と見なされるが、見方を変えれば人為では作り得ない自然の魅力的な表情を見せる。彼女はその「縮み」の凹凸を、色漆や金属粉などを塗り込みながら力強い独創的な漆表現を探究している。彼女は「縮み」に対して、「力強く、野生的な生命力を感じさせる。不可思議な模様を作り出す縮みを見る時に喚起する感情は、自然に対して驚嘆し、関心を寄せる原始的な感動に近い。」と述べている。



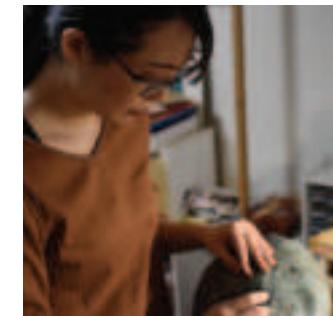
FIRST  
PATRONAGE  
PROGRAM  
Vol.5 2021秋

齋藤みどり（さいとう・みどり）

## 漆芸作家

1992 神奈川県横浜市生まれ  
現在金沢市在住

特徴 | 乾漆、漆縮み



漆の「縮み」という特性を用いて作品制作をしています。美しい艶や華麗な加飾とは異なる漆的一面として面白みを感じただければ幸いです。

## 主な展覧会

2020 金沢市デジタル工芸展(オンライン)  
2015 金沢工芸アート・チャリティーオークション  
(金沢21世紀美術館シアター21、石川)  
2015 コウゲイ℃-素材と今の接觸点  
(グループ展：金沢21世紀美術館市民ギャラリーB、石川)  
2015 卒展セレクション（金沢アートグミ、石川）



# 島田怜奈

## バイオグラフィー

- 2017 彦十蒔絵に参加
- 2014 重要無形文化財輪島塗技術伝承者養成事業伝承者
- 2012 蒔絵師 坂下好晴氏に師事
- 2011 石川県立輪島漆芸技術研修所蒔絵科修了
- 2008 秋田公立美術工芸短期大学  
工芸美術学科漆工芸コース修了

## 受賞／入選／収蔵

- 2021 輪島塗加飾見本展 輪島工芸会賞受賞
- 2020 第55回全国漆器展  
NPO法人食空間コーディネート協会賞受賞  
ふくもの重（吉田漆器工房）加飾デザインを担当
- 2019 輪島塗加飾見本展 輪島工芸会賞受賞

11

## 推薦者 | 若宮隆志 | 彦十蒔絵プロデューサー、2014年度文化庁文化交流使

島田怜奈さんは石川県立輪島漆芸技術研修所卒業後、輪島市の蒔絵師坂下好晴師に弟子入り、その後は独立職人となり作家活動もしながら塗師屋から仕事を請け負う。師の坂下氏が得意とする鮮やかな色遣いに憧れて、島田さんは弟子の頃色漆の発色について丹念に学んだことが今の仕事に大変役に立っている。漆の色では発色が最も難しいとされる白漆を上手に操り、仕上がり後の色合いを予測し絵の具で描いたような漆絵には彼女の特徴が生かされている。彦十蒔絵では島田さんに協力してもらい西洋油絵、浮世絵、水墨画等を漆絵や蒔絵で見立てる技術を開発し海外コレクターの好みを研究しながら島田さん本人も分からぬ領域にチャレンジしている。

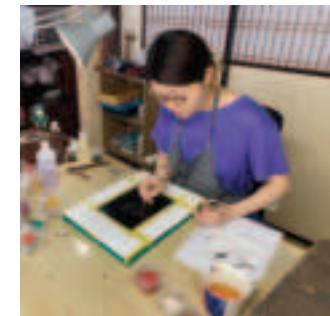


島田怜奈（しまだ・れいな）

蒔絵アーティスト

1987 北海道網走市生まれ 兵庫県三田市  
で育つ 現在 石川県輪島市で制作

特徴 | 蒔絵、箔絵、彩度の高い漆絵



小さな感動を手に取って過ごせたら一日がもっと楽しくならないかな？と、その時々で楽しい！と感じたものを模様に落とし込んで作品に触れた人と新鮮な気持ちを共有したいと思って制作しています。

## 主な展覧会

- 2020 re:collections いろとかたち（グループ展）（金沢クラフト広阪、金沢）
- 2018 ななつのうつわ展（グループ展）（金沢クラフト広阪、金沢）



# 晃 男

## バイオグラフィー

2021～金沢美術工芸大学 大学院美術工芸研究科博士在籍  
2019～現在 中国魯迅美術学院工芸科 助教  
2017～2019 中国魯迅美術学院工芸科 助手  
2017 金沢美術工芸大学 大学院美術工芸研究科 修了

## 受賞／入選／収蔵

- 2017 KANABI クリエイティブ賞 2016  
卒業.修了制作部門審査員特別賞
- 国際漆展.石川2017 入選
- 第3回 金沢.世界工芸トリエンナーレ 入選
- 2019 高島屋美術画廊X買上  
(「生命. 動きV」2018年制作)

12

## 推薦者 | 田中信行 | 漆造形家、金沢美術工芸大学教授

晁男さんは、留学生として2014年から2017年まで金沢美術工芸大学大学院で学び、中国に帰国後は大連にあります魯迅美術学院の漆専攻の教員として、漆芸教育に関わりながら制作活動を行ってきました。現在は、再度来日し、博士の学生として研究活動を行っています。彼女の作品の特色は、金網を用いた原型作りにあります。金網による凹凸を伴った有機的な動きを、乾漆技法によって形に置き換え、漆塗りを施し作品を完成させています。作者独自の生命感溢れる漆造形作品は、従来の伝統的な漆に付帯するイメージからの脱却を模索しながら、漆による新しい造形表現を探求しており、今後の中国の漆芸を担う人材の一人として期待されています。



晁 男 (ちょう・なん)

漆芸家

1990 中国唐山生まれ  
現在金沢市在住、金沢で制作



特徴 | 漆の乾漆成形

大学時代から漆の艶の塗り面に深いところまで沈んでいくような見える感覚、微妙に異なる不思議なものを引き付けられて、今まで漆制作を継続できた。漆の新たな未知の力を見つけ、作品を作りたいと考えている。

## 主な展覧会

- 2015 -素材と今の接觸点- (21世紀美術館)
- 2017 ASIA NOW 2017 (Paris)
- 2018 福州国際漆艺双年展 (中国福州)
- 2019 「漆表現の現在 Vol.2」 (高島屋美術画廊X、東京)  
World of Lacquer : Vessel & Form 2019  
Hubei international Triennial of Lacquer Art (湖北美術館、中国湖北)



# 伴野 崇

## バイオグラフィー

- 2018 独立、制作拠点を長野県に移す
- 2017 年季明け
- 2013 小森邦衛氏に師事
- 2010~2013 石川県漆輪島漆芸技術研修所髹漆科入所、卒業
- 2001~2010 宮城県伝統的工芸品である「仙台箪笥」の漆塗りに携わる

## 受賞／入選／収蔵

- 2020 第67回日本伝統工芸展 日本工芸会奨励賞  
第60回東日本伝統工芸展 朝日新聞社賞  
(以後連続入選)
- 2018 一般社団法人イセ文化財団 収蔵  
(乾漆盛器「余炎」、2017年)
- 2013 第32回日本伝統漆芸展 朝日新聞社賞  
(以後連続入選)

13

## 推薦者 | 小森邦衛 | 重要無形文化財「髹漆」保持者

平成25年石川県立輪島漆芸技術研修所卒業後、小森邦衛工房にて修行に入る。工房在籍中平成27年第32回日本伝統漆芸展初出品で朝日新聞社賞受賞。平成30年故郷の長野県に移住。公募展、グループ展と活動の幅を広げ、令和元年「生まれ変わる伝統：イセ・コレクション所蔵・現代日本の工芸品」香港大学美術博物館に出品。令和2年第60回東日本伝統工芸展で朝日新聞社賞、同年第67回日本伝統工芸展初入選で奨励賞を受賞。乾漆技法を中心に花塗（塗り立て）と呂色仕上げを使い分け、自分の思想を主張する作品と日常使ってもらえる漆器をとの考えを中心に置き制作発表している。漆芸作家として将来期待できる若手の一人である。



伴野 崇（ともの・たかし）

漆芸家

1983 長野県佐久市生まれ  
石川県輪島市経て 現在 長野県南佐久郡  
佐久穂町にて制作、在住

特徴 | 髙漆



漆の素材が本来もつ優れた実用性と艶やかな質感の魅力を最大限引き出すことを理念とし、使う人のことと自分らしさとのバランスを探求し制作に励んでいる。

## 主な展覧会

- 2021 第61回東日本伝統工芸展（日本橋三越本店、東京）  
第38回日本伝統漆芸展（西武池袋本店他、東京他4ヵ所）
- 2020 第67回日本伝統工芸展（日本橋三越本店他、東京他10ヵ所）
- 2019 生まれ変わる伝統：イセ・コレクション所蔵・現代日本の工芸品  
(香港大学美術博物館、香港)  
小森邦衛一門 一滴の漆展  
ジェイアール名古屋タカシマヤ美術画廊、愛知)

# 佐藤幸恵

## バイオグラフィー

- 2018 平成30年度ポーラ美術振興財團在外研修生として  
ポルトガルにて研修
- 2015-2017 ガラス工房秀緑所属
- 2012 Art Glass Solutions アーティスト・イン・レジデンス  
/ シンガポール
- 2011 富山ガラス造形研究所造形科
- 2009 筑波大学芸術専門学群構成専攻クラフト領域  
ガラス分野 卒業



## 推薦者 | 斎藤敏寿 | 筑波大学芸術系工芸領域准教授

佐藤幸恵のガラスを主素材とした作品群は、どこか何千年も前に作られ交易の際に沈没した船の積荷（海の底）から現在に蘇った様な、なんともいえない儚さと力強さを纏った造形である。ガラスの特性を熟知した上で、金属線や陶磁のカケラなどを融合させた佐藤にしか成し得ない多様性と独自性を持った作品を制作している。日本に留まる事なく様々な国々で発表する機会を得て、益々の飛躍を期待させる作家である。



佐藤幸恵（さとう・ゆきえ）

## ガラス作家

1986 福島県出身  
現在 東京都在住、自宅のアトリエで制作

特徴 | ガラスキャスティング（鋳造）



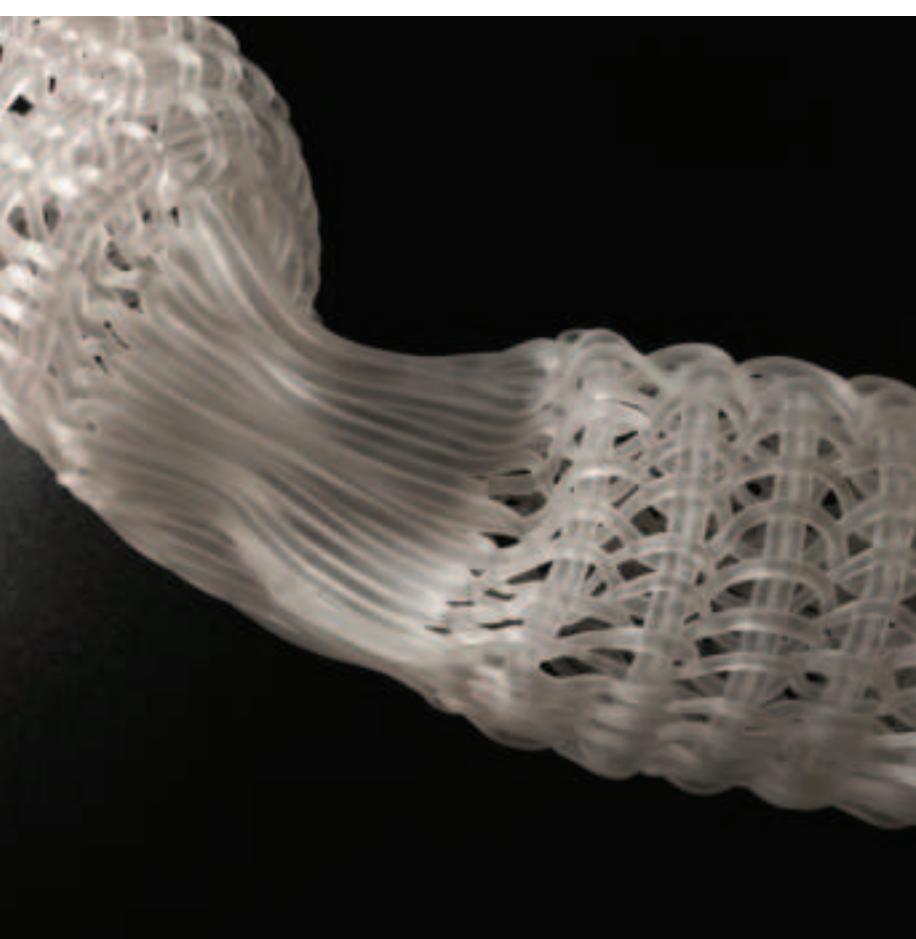
14

## 受賞／入選／収蔵

- 2014 第9回 大黒屋現代アート公募展 入選
- 2014 東京都港区西麻布いきいきプラザ収蔵
- 2013 E W A A イーストウエスト芸術大賞 ファイナリスト
- 2012 E W A A イーストウエスト芸術大賞 ファイナリスト  
選出
- 2008 第4回KOGANEZAKI・器のかたち・現代ガラス展」  
入選

## 主な展覧会

- 2021 COMPLEXION (個展 : Arts & Crafts Gallery 介末、上海)
- 2020 ガラス3人展 (手仕事扱いこもり、長野)
- 2018 NEW GLASS IDEAS #1 (富山市ガラス美術館、富山)
- 2015 1/F ゆらぎ (Glass Gallery KARANIS、東京)
- 2013 ユクトコロ ソノ気色 (gallery福果、東京)



# 竹岡健輔

## バイオグラフィー

2021 富山ガラス造形研究所研究科 卒業  
2019 多摩美術大学美術学部工芸学科ガラスプログラム卒業

## 受賞／入選／収蔵

- 2021 Glass Art Society virtual2021 STUDENT EXHIBITION 1ST PLACE
- 2021 第43回日本新工芸学生選抜展 ニューカラー写真印刷賞
- 2019 能登島ガラス美術館 収蔵  
国際ガラス展・金沢2019 銀賞  
T.A.G. AWARD2019 U-22賞

15



## 推薦者 | 本郷仁 | 富山市立富山ガラス造形研究所 主任教授、富山ガラス工房 館長

ガラスは、その温度によって全く違う表情を見せる。高温では素材自体が動き、柔らかく有機的なフォルムを見せるが、一度冷めると繊細で硬質な素材となる。竹岡は、その変化そのものを素材の特徴として捉え、一つの造形物の中でその対比を見せる。整然と並べられた硬質なガラスでの織りの表情は、吹きガラス技法により柔らかく膨らみ、ガラスの持つ伸びやかな形態へと変化する。そしてそのダイナミックなフォルムはやがて動きを止め、一瞬の表情を永遠に留める。この造形を可能にするのは、竹岡の、素材の魅力を引き出すための工夫に満ちた技、素材に対する素直な感性と造形力、そして勞をいとわない仕事へのこだわりである。一作ごとに進化する竹岡の作品はいつも新鮮で興味深い。

竹岡健輔 (たけおか・けんすけ)

ガラス作家

1996 神奈川県横浜市生まれ  
現在 富山県富山市在住、制作

特徴 | ガラス/吹きガラス、ホットワーク、  
キルンワーク



私の作品づくりは竹工芸の編み方や構造、模様などから着想を得ている。ホットワークや電気炉を使った彫刻作品から普段使いの器や花器なども制作している。

## 主な展覧会

- 2021 国際工芸アワードとやま2020 (富山県美術館、富山)
- 2020 竹岡健輔展・Handiwork(日本橋高島屋S.C.アートアベニュー、東京)
- 2019 第58回日本クラフト展 (東京ミッドタウン、東京)
- 2018 個展「竹岡健輔ガラス作品展」(ギャラリー元町、神奈川県)
- 2018 第14回 '18日本のガラス展 (代官山ヒルサイドテラス、東京)



# 野口真愛

## バイオグラフィー

2021 富山市立富山ガラス造形研究所造形科 卒業

2019 多摩美術大学美術学部工芸学科ガラスプログラム 卒業

## 受賞／入選／収蔵

16

**推薦者 | 本郷仁** | 富山市立富山ガラス造形研究所 主任教授、富山ガラス工房 館長  
高温のガラスは、自らが発する熱と光の中で、自然の力に従いながら動く。そして冷めるにつれて動きはゆっくりとなり、やがてダイナミックな動きを留めた光の塊となる。ガラスはまさしく「固化した液体」なのである。野口は、このガラスの最も特徴的で魅力的な素材感に惹かれ、熱いガラスの塊で造形することにこだわっている。彼女の作品は、今にも動き出しそうな形態が強い存在感を放つ。一見、素材自らが形を生み出しているように思えるフォルムだが野口は事前に膨大なエスキースとモデルを準備し、ガラスの一瞬の動きをとらえる。つまり作品は野口の美意識の塊なのである。自らが美しいと感じる形を素材との協働作業で生み出す、そんな素直な感性が、今後どのような美しさに向かうのか、大変楽しみである。



野口真愛（のぐち・まえ）

ガラス作家

1993 神奈川県横浜市生まれ  
現在 富山県富山市に在住、制作

特徴 | ガラス、ホットワーク、  
ソリッドワーク



作品作りに於いて、ホットワークという技法を用いることでガラスの純粹さを保つことができると感じています。このガラスの最も特徴的で魅力的な素材感に惹かれ、主にオブジェクトを制作しています。

## 主な展覧会

2021 富山市立富山ガラス造形研究所卒業制作展  
(富山市ガラス美術館、富山)

2019 Conversations'V (グループ展 青山スパイラル、東京)  
多摩美術大学美術学部工芸学科卒業制作展(青山スパイラル、東京)



# 石井佑果

## バイオグラフィー

2021 女子美術大学芸術学部デザイン・工芸学科工芸専攻  
テキスタイルコース 織 卒業

## 受賞／入選／収蔵

17

## 推薦者 | 渡邊三奈子 | 女子美術大学工芸専攻教授

溢れるほどに中身が詰まった冷蔵庫。この作品は意外にも多国籍の人々が共生する横浜のイチョウ団地が舞台だ。「無機質な団地とその中で生きる人々の活力」を「冷蔵庫に詰め込まれた雑多な食材」に擬えている。多国籍×団地=食物×冷蔵庫。誰にとっても必需である「食と冷蔵庫」で、地域社会の多様化をクローズアップした視点は独特で、今の日本を鏡のように映し出している。辛うじて安定を保っている冷蔵庫の形、紫と黄の補色を基調とした華やかで多彩な色使い、野菜や果実の立体表現は、繊維による表現の全てを集約した力がある。その一体感と密度は、見る人に興味を抱かせ、見る程に惹き付け、見飽きることの無い圧倒的な存在感を放っている。



FIRST  
PATRONAGE  
PROGRAM

Vol.5 2021秋

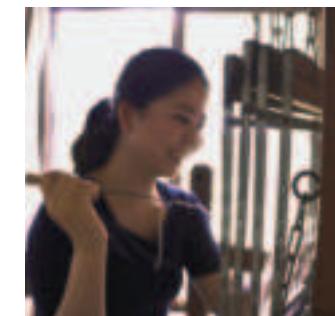
石井佑果（いしい・ゆうか）

テキスタイル作家

1997 神奈川県横浜市生まれ  
現在 横浜市在住

特徴 | 縦織、かぎ針編み、  
異素材との組み合わせ

日常生活における身近なモノをモチーフに、縦織でタペストリー制作や異素材を用いてかぎ針編みで立体造形をしています。



## 主な展覧会

2021 女子美術大学同窓会第8回神奈川支部展  
(アートフォーラムあざみ野、神奈川)  
女子美術大学芸術学部デザイン・工芸学科工芸専攻卒業制作展  
(青山スパイラルガーデン、東京)



# 関水美穂

## バイオグラフィー

2018~2021 東京藝術大学染織研究室教育研究助手  
2014 会員制工房に染色テクニカルスタッフとして勤務  
同大学院工芸分野染色専攻 修了  
2012 東京藝術大学美術学部工芸科 卒業

## 受賞／入選／収蔵

2020 The 11th International Fiber Art Biennale 入選  
2013 神奈川県美術展《準大賞》受賞  
次世代工芸展《審査員賞》受賞  
2012 全国染織展《奨励賞》受賞

18



FIRST  
PATRONAGE  
PROGRAM  
Vol.5 2021秋

## 推薦者 | 上原利丸 | 東京藝術大学美術学部工芸科教授

関水美穂さんは東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻染織研究分野を優秀な成績で修了後、同研究室の教育研究室に在籍していました。現在は、若手のアーティストとしても公募展で受賞を重ねるなど高い評価を得つつあります。彼女の作家活動の基軸の一つに日本の染色の発展に大きく関係する着物の形態に伴うデザインに対する研究・考察があります。科学技術の発達や情報媒体の進歩によって得られるものから、従来の自然物や花鳥風月を時代の感覚にアップデートしていく試みは着物の意匠等が有しているアート性をより発展していくものです。今後の伝統技法の新しい表現の可能性・展開は、伝統工芸の重要性の発信と日本国内にとどまらずグローバル社会にも対応していくものと確信しています。

関水美穂（せきみす・みほ）

着物作家

1987 神奈川県藤沢市生まれ  
現在 同市にて制作

特徴 | 型染、引き染め、ぼかし



花鳥風月のアップデートをテーマに、現代の自然をモチーフにした型染着物を制作。また、着物が持つ鑑賞性に着目しアート作品としての着物を提案している。

## 主な展覧会

2021 仁和寺御室芸術4.8project（御室仁和寺、京都）  
アート、華を厳る（東大寺、奈良）  
2020 コモゴモ展Exhibition（ホテルヴィラントースグランド東京有明、東京）  
MITSUKOSHI×東京藝術大学-夏の芸術祭2020-（日本橋三越、東京）  
2019 テキスタイルの風（入間市美術館、埼玉）



# 濱口佳純

## バイオグラフィー

現在 石川県で制作  
2019 金沢美術工芸大学大学院 美術工芸研究科  
修士課程鑄金専攻 修了  
2017 金沢美術工芸大学工芸科鑄金専攻 卒業  
2013 熊本県立第二高等学校美術科 卒業

## 受賞／入選／収蔵

2017 第9回佐野ルネッサンス鋳金属展 《第2部門 奨励賞》  
受賞  
2016 金沢美術工芸大学 卒業制作買上  
(みなもーながれるー・ーゆがむー・ーおちるー 2016)  
2015 第8回佐野ルネッサンス鋳金属展 《第2部門》入選

19



## 推薦者 | 畠山耕治 | 金属作家、金沢美術工芸大学教授

作者はその制作を通して、初めて体験した鋳金という技法と金属という素材の魅力を追求してきた。「私が工芸分野の中で鋳金を選択したのは、最も認識が薄かったからである。そのため、初めて铸造する場面を見て強く惹かれた。強固な金属が熱を帯び溶解され、液体になり、冷めるとまたその形態を維持し硬化する。神秘的な光を放ち、その状態を永遠に留めるかのような金属という素材は、人を引き付ける魅力がある」、と述べている。表現の軸となるのは、記憶である。それは、幼少の頃よりの川や水辺の「みなも」の記憶より派生している。確かに、強固な金属が溶解され、液体状に変化していく様は、神秘的な光を放つ水面に置き換えることができる。その微妙な表面の変化を、「かわらないけしき」としてより深淵に表現していくとする造形は、今後に大いなる期待を持たせるものである。

濱口佳純（はまぐち・かすみ）  
鋳金作家

1995 熊本県生まれ 現在 石川県で制作

特徴 | 鋳金、金属、CO2型铸造法、  
樹脂原型



日常にある一瞬の痕跡を金属に置き換え、日々の美しさ、大きさを込めた「みなも」の作品や、暮らしにそっと寄り添える鋳物の日用品など制作しています。作品を通して金属の温かさを感じて頂けたら幸いです。

## 主な展覧会

2021 Metal works- 奥深き金属工芸 - (石川県立伝統産業工芸館、金沢)  
2019 金沢美術工芸大学卒業・修了制作展 (21世紀美術館、金沢)  
2017 かわらないけしき (個展 : Cafe&Gallery musee、金沢)  
森・神秘・Art ~古き社のかたわらに語りかけるカタチ~  
(和田屋、石川)  
美術館ワンダーランド2017 ~イロ・モノノ ハコニワ~  
(安曇野市豊科近代美術館、長野)



# 亘 章吾

## バイオグラフィー

- 2020 仕事の傍ら工房を構え作家としての制作を始める
- 2019 中川周士氏が主宰を務める「中川木工芸比良工房」入社
- 2016 アイルランド「JOSEPH WALSH STUDIO」入所
- 2014 木工の道を志し「森林たくみ塾」入所
- 1987 京都の木材問屋に生まれる

## 受賞／入選／収蔵

- 2020 改組新第7回日展 入選

20



Vol.5 2021秋

## 推薦者 | 中川周士 | 桶職人、中川木工芸 比良工房主宰

彼との出会いは日本を遠く離れたアイルランドの田舎町であった。国内外で多くの活躍する木工職人や作家を輩出している岐阜にある森林たくみ塾で木工を学び、その後、単身アイルランドに渡り曲木の家具で世界的に活躍しているJOSEPH WALSHの工房のスタッフとしてその技術を学びながら働いていた。日本に戻った後は中川木工芸のスタッフとなりました。森林たくみ塾（指物）、JOSEPH WALSH STUDIO（曲木家具）、中川木工芸（木桶）それぞれ全く違う木工技術、それらが彼の中で混ざりあい、醸成され個性ある作品へと成熟しようとしています。彼の生み出す作品は木工業界に新しい潮流を生むと考えます。今後の彼の活躍に期待しています。

亘 章吾（わたり・しょうご）

## 曲木造形作家

1987京都府京都市生まれ  
岐阜県飛騨高山、アイルランドを経て、  
現在 京都市にて制作

特徴 | 積層曲木（技術）、吉野檜（素材）



自然が創る曲線の世界、人間が創る直線の世界。その両者の間に存在するであろう美を、吉野檜と曲木技術を用い表現しています。そこに木という素材の新たな造形的可能性があると確信し制作しています。

## 主な展覧会

- 2020 改組新第7回日展（国立新美術館、東京 京都市京セラ美術館、京都）
- 2021 RE:OPENING CEREMONY一周年記念展  
(A Lighthouse called Kanata、東京)